

日本聖公会 管区事務所だより

日本聖公会管区事務所

162-0805 東京都新宿区矢来町 65

電話 03 (5228) 3171 FAX 03 (5228) 3175

発行者 総主事 司祭 矢萩 新一

「信仰は抑止力になり得る?！」

— 子どもたちの未来のために —

管区事務所総主事 司祭 エッセイ 矢萩新一

第61定期総会期の管区事務所総主事に任命されました矢萩です。若輩者ですが、みなさまのお祈りと励ましを頂きながら、与えられた使命をまっとうしていきたくと思いますので、どうぞよろしくお願い致します。

前任教会に赴任して間もない頃、地域の「9条の会」立ち上げをぜひ一緒にと誘われたのがきっかけで、「子どもたちの未来のために」という幟を持って毎月9の付く日の朝に地域の交差点に立ちながら、憲法について考える機会が与えられてきました。集团的自衛権の行使を容認する憲法解釈変更が閣議決定され、憲法第9条が守られない危険性を憂慮します。日本聖公会では、正義と平和委員会・人権担当者の連名で抗議声明を出し、世界教会協議会(WCC)中央委員会でも抗議声明が採択されています。日本のみならず世界の教会が注目しているということです。敗戦後、憲法9条を守り続けてきた日本国民にノーベル平和賞をと、その申請が選考委員会に受理されていますし、9条を世界遺産にとの素敵な声もあります。

今年、6月23日の沖縄慰霊の日を挟んで、沖縄週間・沖縄の旅に参加してきました。沖縄では憲法が守られていない、すべての法律や決まりの一番上にあるはずの憲法が、日米安全保障条約によってないがしろにされています。命こそ宝、誰も殺したくない、殺されたくないという沖縄の方々の強い思いに賛同します。辺野古の美しい海の上から基地建設予定地とされている場所を見せて頂いた船の中で思いを新たにしました。アメリカ政府は現地に反対の意思があれば基地建設をしないとやっているようですが、どうやら日本政府の側に、強硬に辺野古に基地を作りたい理由があるようです。積極的平和主義・集团的自衛権という発想の根底には、戦力や核が抑止力になるという考えがあると思いますが、そこにはたくさんの犠牲を生み出す構造的な暴力があります。そこで、私たちが依って立つとこ

□会議・プログラム等予定

(6月25日以降および
前回報告以降追加分)

7月

- 3日(木) 常議員会〔管区事務所〕
- 10日(木) 原発問題プロジェクト/運営委員会〔管区事務所〕
- 14日(月) 正義と平和・日韓協働プロジェクト〔管区事務所〕
- 16日(水) ~ 17日(木) 書記局会〔管区事務所〕
- 24日(木) 文書保管委員会〔管区事務所〕

8月

- 11日(月) ~ 15日(金) 日韓聖公会青年セミナー〔仙台〕
- 18日(月) 主事会議〔管区事務所〕
- 19日(火) 正義と平和委員会〔京都教区センター〕
- 26日(火) 正義と平和・沖縄プロジェクト〔沖縄教区センター〕

9月

- 4日(木) 正義と平和・日韓協働プロジェクト〔管区事務所〕
- 12日(金) 礼拝委員会〔管区事務所〕
- 12日(金) 祈祷書改正準備委員会〔管区事務所〕
- 17日(水) 聖公会/ローマ・カトリック教会合同委員会〔管区事務所〕
- 18日(木) 常議員会〔管区事務所〕
- 19日(金) 女性の聖職に関わる諸問題についての調整と検証・提言作成のための特別委員会〔管区事務所〕
- 25日(木) 文書保管委員会〔管区事務所〕
- 25日(木) ~ 29日(月) 韓国社会宣教スタディーツアー〔ソウル〕
- 29日(月) 原発問題プロジェクト/運営委員会〔郡山〕
- 30日(火) 管区共通聖職試験委員会〔管区事務所〕

<関係諸団体等会議・他>

- 8月21日(木) ~ 22日(金) 聖公会関係学校教職員研修会〔神戸・八代学院〕

■管区事務所夏期休業

8月11日(月) ~ 8月15日(金)の間夏期休業いたします。よろしくお願ひいたします。緊急の場合は総主事まで御連絡ください。

ろは、憲法第9条はもちろん、ニューヨーク国連広場の壁に刻まれている世界最古?の平和主義を貫く言葉「彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」というイザヤ書の言葉です。政治と宗教が戦争を肯定してきた過去の反省に立ち、この旧約聖書の言葉が「信仰による抑止力」として、当たり前の世界標準になることを願います。真の抑止力は、一人一人の命がだいにされる為に祈り、行動していく信仰だと私は真剣に思うのです。

あるコンサートのステージトークでの「自分の人生って何だろうと最近考える。今まで自分の幸せの為だけを思って生きていたときはしんどかったけど、誰かの幸福のために自分の音楽が貢献できていると感じられたとき、本当に嬉しくて心から楽しく、幸せな人生だと感じられるようになった」という音楽家の言葉が印象に残っています。私たちは自分だけの幸せを求めて教会に集うのか? 代祷の中で隣人の為に祈るのは高慢なのか? という迷いが晴れていくような気がしました。

□常議員会

第61(定期)総会期第1回 7月3日(木)

1. 61総会期の書記に、木村直樹司祭を選任した。
2. 総主事の推薦に基づき、管区事務所の主事に以下の方々を選任した。
総務主事：大山義幸(東京教区)、宣教主事：司祭 磯 晴久(大阪教区)、渉外主事：司祭 ポール・マイケル・トルハースト(神戸教区)、広報主事：鈴木 一(東京教区)
財政主事：尾崎茂雄(横浜教区)
3. 第61(定期)総会期 諸委員推薦(案)(別紙)が管区事務所より提出され、協議した。
(案)にある年金維持資金管理委員会の委員 中村豊主教(神戸)を担当主教とし、空席となった委員に、中林三平(横浜教区)を選任する修正をしたうえで、承認した。
4. いっしょに歩こう!パートⅡ「だいに・東北」の予算執行状況ならびに予算措置未定分について、長谷川清純司祭(だいに・東北 室長)より説明を受けた。4,637千円の不足が見込まれるため、5,000千円の拠出の要請があり、検討・協議の結果、承認された。
5. その他
 - ① 原発と放射能に関する特別問題プロジェクトに関して、2016年定期総会にて見直しをする。(2013年4月10日開催の59-5

常議員会決議

また、郡山、南相馬の放射能汚染の深刻な現状について説明があり、また東北教区のみでの支援活動は困難であるので管区としての支援が必要との報告を受けた。

② 教役者給与支援システム実施要綱 8. ⇒ 4年ごとに見直すものとする。

(2012年9月12日開催の59-2常議員会決議)

③ 大斎克己献金国内伝道強化プロジェクトに関して

2014年2月4日~6日に開催された、第209回(定期)主教会にて、原案を主事会議で作成するよう依頼があった。選定基準および手続きは常議員会の承認事項である。建物への支援が主であったが、今後は活動についても支援ができるようにする、また小規模のプロジェクト支援も視野に入れるようにするなど、運用について見直すことなどが協議された。

④ 宣教協働者招聘事業の財源に関して
実施要綱7.本業の財源 ⇒「招聘事業が軌道に乗った段階で、献金等により、この資金の補てん・充実を計ってゆくものとする。」とある。資金が枯渇しているので、今後は新しい宣教協働者を招聘することができない現状が協議された。

⑤ 年金規約一部改正の実施時期に関して

61(定期)総会で、「日本聖公会年金規約一部改正の件」が承認されたが、この実施時期について、2015年1月から実施することとした。

6. 次回以降の常議員会
9月18日(木)・11月26日(水)

以上

《人 事》

京都

司祭 ヤコブ岩田光正 2014年6月28日付 大津聖マリア教会牧師補の任を解く。
大津聖マリア教会牧師に任命する。
司祭 ミカエル藤原健久 2014年6月28日付 大津聖マリア教会管理の委嘱を解く。

2014年沖縄週間 / 沖縄の旅・報告

6月20日(金)～23日(月)

命どう宝 ～御心が行われますように～

団長 司祭 アンデレ 磯 晴久

1995年から始まった「沖縄週間/沖縄の旅」は、今年で20回目を迎えた。そして2014年5月27～29日開催された日本聖公会第61(定期)総会では、さらに「沖縄週間」の4年間の継続が決議され、沖縄の旅も継続して行われることになる。沖縄の歴史と現在、その痛みを学び、私たちが主の平和を求めて祈ることを目的とする、こうした旅が途切れることなく、20回も続けられてきたことは、スタッフの努力・熱意はもちろん、講師の方々や証言者、平和ガイドの皆様、参加者、そして何より沖縄教区の皆様の支えがあったからだ。と同時に複雑な思いに駆られる。それは沖縄が背負わされている重荷が、軽くされるどころか、年々重くなっている現実がこの旅を継続させているからだ。

さて、今年の沖縄の旅は、6月20日(金)～23日(月)に行われた。多様な内容だったが、特に私の印象に残っていることについて報告させて頂く。ご了承をお願いしたい。

<1日目>

私たちは、全国各地から那覇空港に集合した。那覇空港では国際線の拡充をうたって、沖合に新滑走路をつくる工事が始まっていた。ご

存じのように那覇空港は、自衛隊と民間が供用する空港である。航空自衛隊はF15戦闘機を20機から倍増する計画をもっており、そのための拡張でもあるのだ。中国をにらんだ動きが目に見える形でも進んでいる。

私たちは嘉手納基地を臨むべく道の駅「かでな」に向かった。広大な嘉手納基地を臨みながら、本土では、敗戦記念日は8月15日だが、沖縄では9月7日である。越来村森根(現在沖縄市嘉手納基地内)で、米軍と南西諸島日本軍守備隊との間で降伏調印式が行われ、悲惨な沖縄戦が終結したことを聞いた。また自衛隊だけではなく、米軍も嘉手納基地に最新鋭ステルス戦闘機F22を常時配備していることを耳にした。集团的自衛権容認で、日米の軍事的一体化は進む。そして日米と中国とが対峙すると、後方拠点の側面が強かった沖縄が、最前線になってしまう危機感を感じる。

道の駅「かでな」から私たちは、沖縄市(コザ)に向かった。

①フィールドトリップ<コザの町に立つ>

私たちは、ガイドの方からコザの町の歴史と成り立ちを聞き、また戦後の特異な歴史を伺いな

がら、上間てんぷら店のおいしい沖縄てんぷらを頂きながら歩いた。コザ暴動を考える「まち歩き」である。現在コザ市という名称はなく、沖縄市である。しかし今でもコザと呼ぶ人は多く、コザ十字路、コザ高校、コザ運動公園、コザミュージックタウンなど「コザ」の名はあちこちに残っている。コザは、米軍基地建設と深く関わりながら、独自の発展を遂げてきた。今も地域の約35%を米軍施設が占め、嘉手納基地のゲートから延びる通りには、英語の看板が軒を連ね、基地建設に伴いフィリピン、中国、インド、メキシコからも人々が流入し店を構えている。日常的に外国人が歩く姿が見られ、独特の雰囲気を醸し出している。コザは、旧盆の頃にはエイサーの街となること、りんけんバンドや喜納昌吉、ネーネーズなどを輩出し、音楽関係の店が80以上も点在する音楽の街であることを、肌で感じながら歩を進めた。

そして私たちは、ヒストリート（沖縄市戦後文化資料展示室）に案内された。ここには基地の街、戦後沖縄の縮図と言われた沖縄市がその責務として、戦後～復帰を見つめ直すことを目的として収集された写真や資料が展示されている。実物大の基地フェンスや模型で再現されたAサインバー（米軍向け飲食店。ベトナム戦争時は300軒近くもあった）などの展示品があった。まち歩きの終点では、コザ暴動があった胡屋（ごや）十字路からゲート通りを歩いて、当時の人々の憤り・怒りへの思いを深めた。

②鳥袋諸聖徒教会へ 開会礼拝・講演会

開会礼拝の後、上原榮正沖縄教区主教よりメッセージを頂いた。その要旨を記す。

「まず沖縄での状況の急変として、辺野古埋め立てには反対の立場にあった仲井眞県知事が、石破幹事長の恫喝を受け、また3000億円10年間の支援と引き換えに、埋め立てを容認。2月の名護市長選挙で埋め立て反対の稲嶺氏が市長に選出されたが、政府はそれを無視するかのよう、淡々と準備をしている。更に、日本と中国・韓国との関係が急変している。尖閣諸島周辺は一発触発の危険な状況にある。石垣・宮古島の漁民たちは大きな痛手を受け、恐怖を感

じている。八重山地区での教科書問題で、政府から大きな圧力がかかっている。海上自衛隊の自衛艦・軍艦が石垣の港に停泊、与那国島への過疎化対策支援の一環として自衛隊基地配備が進められ、日本はますます戦争ができる国になりつつある。国が基地を押し付けてくるとき、大きなお金がばらまかれ、人心を分断していく。自民党はアベノミクスという経済効果を武器に、憲法解釈の変更や改憲を主張。武器輸出3原則も変更し、武器を売りに出している。過去の歴史を曲げて、侵略戦争も、慰安婦問題も自分たちの都合の悪いことは覆い隠す。ヘイトスピーチの問題もある。そうした状況の中で、今年の旅は行われようとしている。真の平和とは何かが問われている。クリスチャンとしての生き方が問われる時代が始まろうとしている。その中で、私たちが進むべき道をはっきりと示すことができる旅になってほしい。」

旅を始めるにあたって、今の状況を的確に指摘し、わたしたちの課題を明確にしてくれるメッセージであった。

③講演会「基地のある町 コザ騒動事件を知る」 講師：古堅宗光（ふるけん そうこう）氏

古堅氏は、青果店を経営しながら、沖縄市の街づくりや人材育成にボランティアとして取り組み、沖縄市市史編集室主催「コザ暴動を語る会」のメインホストを務めておられる。私たちもお世話になった街あるきのガイドとして、現地での追体験や実際に起きた現場を見ながら当時の状況を説明しておられる。2,000人以上の方から、コザ暴動の聴き取り調査も行っておられる。



「コザ暴動」を考える、まち歩き

コザ暴動当時、古堅氏は22歳であった。

<コザ暴動の背景と暴動当日>当時コザ市は、米国統治下・米軍占領下にあり、米軍嘉手納基地と陸軍キャンプを抱え、米国人・軍属相手の飲食店や洋品店などが立ち並んでいた。市民には基地への納入業者、基地建設に従事する土木建築労働者、基地で働く軍属も多かった。事件当時はベトナム戦争の最中で、米軍関係者の消費活動は著しく、市経済の80%は基地に依存していた。米軍向け飲食店(Aサイン)は300軒近くもあった。しかし沖縄コザの人々には、経済的に依存しながらも、米軍に対する不満は、積りに積もっていた。それは米軍人による犯罪と、それに対する処分の不十分さからくるものであった。1955年頃幼い少女が米兵に暴行されて殺され、ごみ捨て場に遺棄された事件は、古堅氏にとっては、今も忘れられない深い痛みと怒りの伴う出来事であった。その他にも、毒ガス漏れ事故、糸満轢殺事件など米軍による事故が多発、しかし米軍人加害者が罪に問われることはなかった。忍耐強い沖縄の人々の我慢も限界にきていた。きっかけは米軍人が沖縄の人をはねた交通事故であるが、米国統治下での圧制、人権侵害への怒りが噴出したのである。戦前の日本と中国、日本と朝鮮、今のイスラエルとパレスチナに見られるように、占領とは辱めであり、人間性を著しく傷つけるものなのだ。

暴動前日12月19日、毒ガス即時完全撤去(糸満轢殺事件抗議も含む)を要求する県民大会が開かれ、その参加者が集会終了後に、またそれ以外の市民も折しも忘年会シーズンでもあり、暴動発生場所(胡屋十字路付近)近くの社交街に多くの人々が集まっていた。そこでこの暴動が始まり、暴動参加人数はおよそ4,000人にのぼった。暴動は12月20日午前1:30から午前7:30まで続き、アメリカ軍白人車両(75台以上)と嘉手納基地内諸施設が放火された。住民側にリーダーもおらず、組織だった動きはなく、暴動は自然発生的であったにもかかわらず、死亡者はゼロ、略奪もなかった。負傷者は88人(沖縄の人は27人)、現行犯逮捕者は21人であった。米人を狙ったり、略奪を起こそうとすると誰かが

止めに入る雰囲気があったとも言う。沖縄の「命どう宝」の精神がよく表れているかもしれない。怒りの対象はあくまで車であり、基地だった。さらに、米軍から利益を享受しており、反米・反基地・日本復帰運動に敵対的だったAサインバー・クラブ従業員も暴動に参加した。それほどに沖縄の人々のプライドがとことん傷つけられ、うっぷんがたまりにたまっていたのである。

お話を伺って印象に残ったのは、第1にはコザ暴動について、私自身何も知らなかったということ。2つ目は占領というのは辱めであり、人間性を著しく傷つけると言うことだ。今の沖縄の状況はどうだろうか。米軍だけでなく、本土の人間によって、辱められ傷つけられておられるのではないか。3つ目はまたそうした状況の中にあって、沖縄の人々の怒りの矛先は、人間ではなくて車と基地に向かったと言うこと、その精神性の豊かさが心に残った。また白人から差別を受けていた黒人にも矛先は向かなかった。

<2日目>

①フィールドトリップ「辺野古に立つ」

午前9:00コザのホテルを出発し、私たちは辺野古に向かう。辺野古は、沖縄本島北部、名護市の東海岸側にある小さな集落だ。この辺野古は、米軍基地建設で揺れている。普天間基地返還の代替地として、辺野古の美しい海を埋め立て、V字型滑走路を作ろうとしている。ここでの闘いは非暴力による行動、座り込みである。私たちは座り込みに参加した。

毎日のように座り込みをしておられる平良悦美さんのことばが心に残る。「ベトナム戦争の頃、毎日爆弾を積みこんでB-52が沖縄から飛び立っていく。“人を殺しに行くんでしょ”という子どもの声に何もできなくて、子どもといっしょに泣きました。私は沖縄が戦争の手伝いをするのが嫌なのです。1997年辺野古に新しい基地を建設すると聞いて、<命を守る会>に加わり、この場に身を置くことにしました。」平良さんは前回命がけて新基地建設を阻止された。今回も覚悟されていると思う。日本はますますアメリカの戦争の手伝いをする国になっていく。それどころか自ら

戦争できる国になっていく。「戦争はいらない」「基地はいらない」という声を、私たちも上げていこう。

原田大介さんという方の詩を思い出す。

殺されるために 生まれてこない
殺すためにも 生まれてこない
戦争は大事なことを忘れている
僕が生まれたのには理由がある
生まれるってことには
みんな理由があるんや



舟から辺野古を体感する



海岸で沖縄戦の痛み・悲しみへの想いを深める

今回のプログラムで、高良司祭の尽力もあり、舟で沖に出て、海から辺野古を見る機会が与えられた。私たちは貴重な体験ができた。辺野古の美しい海や美しい魚たち、ジュゴンのえさとなる海藻を見ることができた。この自然の宝を傷つけ、失うことがあってはならないと心底感じる。沖から基地キャンプシュアブを眺める。工事

を前にしてだろうか、基地内で、建物の撤去と新設がどんどん行われている。わたしたちの税金から支払われている思いやり予算8,000億円から支出されている。一人でも多くの方が、この現実を見て、知って欲しいと願う。

②午後、私たちは名護聖ヨハネ教会で分かち合いの時を持ち、そのあと各教会分宿先へと向かった。

<3日目>

私たちは各分宿先教会の主日礼拝に参加した。磯は愛楽園祈りの家教会で、説教のご奉仕をさせて頂いた。礼拝後、東京教区森田信也・麻里子夫妻と共に津留司祭に愛楽園を案内して頂き、創始者青木恵哉先生について、ハンセン病患者の苦難についてお話を聞く機会が与えられた。この世に生を与えられることなく墮胎させられ葬られていった「声なきこども」の碑に胸打たれる。

また三原聖ペテロ聖パウロ教会では、昨晚信徒の方による沖縄戦の証言を聞く機会があったと伺った。プログラムのどこかで、やはり証言を聞く機会が必要かとも感じている。

午後、沖縄教区の行事である「慰霊の日」礼拝に出席するため北谷諸魂教会に向かった。今回も新たに氏名が判明した方々の名が読み上げられ、祈りがささげられた。礼拝後の講演は、「福島は今一原発問題プロジェクトの取り組みから一」原発と放射能に関する特別問題プロジェクト事務局長・池住圭さんからお話を伺った。講演の中で、一番心に残ったのは震災から3年、原発事故によって避難生活を余儀なくされている方々は、国の方針もはっきりせず、故郷にもどることができるのか、新たなところに住まざるを得ないのか、決めることができないつらい状況に追い込まれておられる。なかには新しい土地に家を建てる方やお子さんの家に同居する方もある。明らかに被災者間で格差が広がってきている。

沖縄の状況と同じように、分断が起こっている。夜は、小禄聖マタイ教会を会場に分かち合い・平和の取り組みについて意見交換を行った。

<4日目>

「戦跡に(魂魄の塔)に立つ」

23日は沖縄県慰霊の日ということで、ひめゆりの塔から徒歩で魂魄の塔へ向かい、海岸にて閉会礼拝をもって、午後1:00旅は無事終了し、解散となった。

・閉会礼拝での磯のメッセージ(要旨)

著名な作家村上春樹のエルサレム賞という文学賞受賞式でのメッセージに「高く、固い壁があり、それにぶつかって壊れる卵があるとしたら、私は常に卵の側に立つ」というのがある。わたしたちも壊れやすい殻をもった卵の側に立ちたいと思う。基地、核兵器、爆弾、戦車、オスプレイ、ステルス戦闘機、ミサイル……は高い壁だ。これらによって押しつぶされ、焼かれ、銃撃を受ける非武装の市民たちが卵。しかし私たちはよおく一人一人を見ると、多かれ少なかれ、皆卵ではないか。私たちはそれぞれ、壊れやすい殻の中に入った个性的でかけがえのない心を持っている卵だ。村上春樹は高い壁の名前は「システム」と呼ぶ。「システム」は私たちを守る存在と思われているが、時に自己増殖し、私たちを殺し、さらに私たちに他者を冷酷かつ効果的、組織的に殺させる力を持つ。今世界のあちこちで起こっている。シリア、イラク、アフガニスタン、ウクライナ、イスラエル・パレスチナ、……米軍基地、原発 日本も戦争できるシステムを構築しようとしている。しかし私たちは、国籍、人種、民族を超越した人間でもあり、一人一人かけがえのないいのちを与えられた存在でもある。

今回の沖縄の旅の聖句「これらの小さい者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない」(マタイ18:14)けれども小さい者のいのちが、世界のあちこちでないがしろにされている。「システム」と言われる堅固な高い壁に直面している壊れやすい卵には、どこからみても、勝ち目は見えてこない。壁はあまりに高く、強固で、冷たい。もし、私たちに勝ち目が見えることがあるとしたら、私たち自身や他者の独自性(たとえば沖縄の文化)やかけがえのなさを、さらに魂を深く互いに交わらせること、つながることで

得ることのできる温かみを強く信じることから生じるのではないか。システムはわたしたちを分断してくる。沖縄でもフクシマでも見られる。わたしたちは魂深くしっかりとつながっていたいと思う。この沖縄の旅で、コザ・辺野古・教会の方々とながりができた。これを大切に歩み出そう。※解散の後、上原主教から韓国には、卵が壁に何回も何回もぶつかって、ついには壁を溶かしてしまう話があると聞いた。これはすごい!

○旅を終えてどこに光を見出すか>

- 1、権力側は黄金をばらまき、分断作戦を取ってくる。わたしたちは何があってもつながっていく、深く魂の部分でつながり続ける。そこに光がある。
- 2、勝ち目があるかどうかに関しては、沖縄の人たちの長期的な希望的楽観主義に学ぶ。そこに光がある。
- 3、想像力が大切だ。沖縄や福島の人々が今経験している恐怖や不安は、遠く離れている人には想像が及ばないと考えられがちである。想像力は同心円的に遠ざかっていくように思われる。しかし、沖縄や福島から遠い人でも、真実に自らの想像力を及ぼそうと努めることができる。中心近くにいるとあまりにおそろしく不安なので、直視できないこともある。近い人ほど勇気を持って過酷な真実を直視しないといけないことがある。どちらもひどく困難なことだが、想像力が大切だ。そこに光がある。 以上



沖縄の旅・参加者一同

「沖縄週間」に参加して

神戸教区松江基督教会
執事 ミカエル 杉野達也

私は「沖縄の旅」に初めて参加し、観光地としての沖縄ではなく、裏側にある現実に触れることができました。今回の旅で特に印象に残ったのが2日目に訪れた辺野古でした。

2008年に沖縄で行われた全国青年大会に参加したとき、初めて辺野古を訪れ、青く透き通っている海と砂浜、大きく広がる自然に思わず「きれい!」その一言しか出ませんでした。座り込みに参加し、ボートで海の中を見せてもらい、参加者全員で集まって、辺野古の砂浜でお祈りを捧げました。

あれから6年、きれいな海と自然は変わっていませんでした。時の経過で変わったのは、基地の中の様子でした。水陸両用戦車が通る道路が砂浜まで伸びており、普天間基地移設へ動き出している様子を見て取ることができました。

6年前、実際に座り込みに参加しましたが、座り込みをして闘っている人たちがなぜここまで真剣になって毎日座り込み、闘っているのか、理解することができませんでした。しかし、今回ここまで真剣に闘っているのは、座り込みをしている人の子どものため、それは将来のためであり、私達が生きていく未来が少しでも安心して過ごしていくことができるように闘っておられるということを知りました。

一般市民を巻き込んだの地上戦の傷跡である軍や基地を抱えている生活、これこそが沖縄の現実であり、この生活によって沖縄の方々を負わされている重荷を肌で感じることができました。これは、実際に沖縄を訪れて自分の目で見て、話を聞かないとわからないものだと思います。最後の分かち合いで、ある方が「若い人たちがこの沖縄の旅に参加してくれることが光であ

り、希望です。」と言われました。私を含め若い人たちがもっと真剣に政治や社会、そして平和へと関心をもたなければいけないと強く感じます。何が本当の平和なのか、私達の将来のため、次の世代のために私に何ができるのか。大きな課題をいただきました。日々の祈りを通して模索し続けていきたい。

「沖縄の旅」

東京教区池袋聖公会
香山美土里

沖縄への旅は、フィールドトリップ「コザの町に立つ」から始まった。ボランティアガイドの方の説明を聞きながら実際に暴動が起った現場に立つ。この旅ならではの体感を大切にしたいプログラムは、実際に起きたことを身近に引き寄せる。1970年米軍支配によって基地経済に依存した街コザで起きた暴動。ある自動車事故を契機に米軍の横暴に長年耐えてきた沖縄の人々の鬱積した不満が爆発した。その現場は寂れてわずかな面影を残す。

フィールドトリップに続き嘉手納基地の見学。島の一番良い場所を74%も占拠して東京ドーム103個分の広大な敷地。米軍機が轟音を轟かせながら飛び立つ飛行場を見学。東京にいると基地の存在が日本の防衛に必要なだとの解釈を耳にするが、現場に行くと違和感を覚える。そこにあるのは人殺しの為の爆弾を積んだ軍機であり、世界中の紛争地へと飛んでいく。日本はもう充分に米国の戦争に手を貸している。ぞっとして鳥肌が立った。

夜は「コザ暴動」の現場にいた古堅宗光さんの講演会。彼は忘年会シーズンの12月コザの街で4～5千人規模で起きた暴動の現場にいた。深夜から朝方。沢山の車や米軍の施設が焼かれたが死者を一人も出さなかったこの事件は「暴動」ではなく「騒動」だという人もいると

の事。敗戦後もそして今も人権侵害が続き、敗戦の痛手を沖縄に押し付けてきた日本の沖縄の人々に対する根強い差別を感じた。

2日目はフィールドトリップ「辺野古に立つ」。この日も晴天に恵まれ青い空と碧の辺野古の海がますます美しい。ここではテント村で座り込みをしている方々からお話を伺うことが出来た。「うちの子ども達は爆弾を積んで毎日どこかに飛んでいく飛行機を見て育ったのだ」と語った。爆弾を落として帰ってくことを知って子供たちが泣いた。基地がある事に反対をしないのは容認していることと同じだ。この思いから活動を始めたとのお話。自分には「弱さ」しかない。だったらこの「弱さ」を武器に闘ったらいい。海の工事を阻止する為に海に潜りカヌーを漕ぎ時には作業に来た若者に「自分が何をやっているか分かるか? お金だけ貰ってなるべく怠けなさいよ。」と声をかけるのだそうだ。座り込みと言うと構えてしまうが、穏やかな美しい海の傍で普通の市民が署名を集め日々の命を削っている。

分泊で三原教会に泊めて頂いた夜、教会員の喜屋武幸清さんの講演を伺った。戦時中米軍が上陸した時、幼い弟妹を抱いた母に兄弟で摺りながら逃げ惑った。ようやくガマに辿り着いた時、日本兵に「泣く子供」は駄目だと言われた母が命の選別を迫られた体験談。「長男である自

分を守るために、母が身を切るような思いでした行為は、母が亡くなるまで一言も聞くことは出来なかった」。この体験は五月にNHK沖縄放送局で放送されラジオや新聞にも取り上げられた。沖縄でもこのような体験談を伺う機会は貴重になったそうだ。最近の政治に危機感を覚え語り始めた喜屋武さんは、何処にでも話しに行くそうだ。

沖縄教区「慰霊の日」礼拝に参加した後は、池住圭姉による講演「福島は今」。苦しむ人々と繋がり、繋がり続けようとする沖縄教区の想いが伝わってくる。

最終日は沖縄県慰霊の日、「戦跡(魂魄)の塔に立つ」。糸満市米須の海岸のそばに立つ塔は海的美しさが一層哀しみを誘う。この美しい海が血に染まり、遺骨になっても拾い集めることを許されず、骨が累々と散らばっていたと聞く。美しい海を望みながら閉会の祈りを行った。聖歌423番(キリスト者の責任)を沖縄で歌い初めて涙が出た。

いろいろな場所を巡り沖縄を体験することが出来た、初めての沖縄の旅。今も米軍基地を置き、なおも踏みつけにして平気である日本政府及び国民の横暴に怒りが込み上げる。旅の最後は沸き起こる怒りで哀しくなった。旅を受け入れて下さった沖縄教区の皆さん、スタッフの方々、出逢った皆さんに感謝。



■お詫びと訂正

前号(第291号)「自民党憲法改正草案を考えるシリーズ・第6回」の執筆者名は、正しくは 寺本眞名 氏でありました。お詫びして訂正いたします。(広報主事)

日本聖公会管区事務所ホームページ <http://www.nskk.orgprovince/>
☆「管区事務所だより」についての要望・寄稿などをメールでお寄せください。
広報主事(鈴木)宛て

第61(定期)総会期諸役員・委員

(2014.07.04)

首座主教 主教 植松 誠(北海道)

総主事 司祭 矢萩新一(京都)

常議員会(法人責任役員)

首座主教 主教 植松 誠(北海道)

常議員 主教 三鍋 裕(横浜) 主教 大畑喜道(東京)

司祭 笹森田鶴(東京) 司祭 西原廉太(東京) 司祭 木村直樹(北関東)

池住 圭(中部) 佐々木靖子(京都) 中林三平(横浜)

主事会議

総主事 司祭 矢萩新一(京都)

総務主事 大山義幸(東京) 渉外主事 司祭 ポール・マイケル・トルハースト(神戸)

宣教主事 司祭 磯 晴久(大阪) 財政主事 尾崎茂雄(横浜) 広報主事 鈴木 一(東京)

人権問題担当

担当主教 主教 武藤謙一(九州)

司祭 井口 諭(東京) 司祭 奥村貴充(大阪) 司祭 中島省三(九州)

打田茉莉(東京)

女性に関する課題の担当者(女性デスク)

木川田道子(京都) 吉谷かおる(神戸)

ハラスメントに関する担当者

担当主教 武藤謙一(九州)

司祭 宮嶋 眞(京都)

女性の聖職者に関わる諸問題についての調査と検証・提言作成のための特別委員会

主教 武藤謙一(九州) 司祭 入江 修(横浜) 司祭 笹森田鶴(東京)

小林幸子(東京) 篠田 茜(京都) 中林三平(横浜)

〔常任の委員〕

祈祷書等検査委員

委員長 司祭 小野寺 達(北関東)

委員 司祭 出口 創(京都) 鈴木 一(東京)

文書保管委員

委員長 大江 満(京都)

委員 司祭 卓 志雄(東京) 諫山禎一郎(東京)

会計監査委員

委員長 塚田一宣(中部)

委員 豊岡 暁(横浜) 鈴木裕子(東京)

〔常設の委員〕

神学教理委員

委員 司祭 岩城 聰(大阪) 司祭 黒田 裕(京都) 近藤 剛(神戸)

司祭 竹内一也(横浜) 司祭 西原廉太(中部)

礼拝委員

担当主教 主教 加藤博道(東北)

委員 司祭 市原信太郎(中部) 司祭 笹森田鶴(東京) 司祭 宮崎 光(東京)

司祭 吉岡容子(九州) 司祭 吉田雅人(神戸)

法憲法規委員

委員 司祭 上原信幸(神戸) 司祭 田澤利之(横浜) 司祭 土井宏純(中部)
司祭 山本 眞(大阪) 山田益男(東京)

〔総会で承認された委員〕

管区審判廷審判員(任期 2012年5月～2016年5月)

教区主教 主教 中村 豊(神戸) 主教 三鍋 裕(横浜) 主教 広田勝一(北関東)
主教 加藤博道(東北) 主教 渋澤一郎(中部)
現任司祭 司祭 小南 晃(神戸) 司祭 小野寺 達(北関東) 司祭 笹森田鶴(東京)
司祭 中尾志朗(中部) 司祭 下澤 昌(北海道)
現在受聖 浅井 正(中部) 山田益男(東京) 宮脇博子(東京)
餐者 小貫晃義(東北) 東 美香子(九州)

〔総会で立てられた特別委員〕

正義と平和委員会

委員長 主教 渋澤一郎(中部)
委員 主教 武藤謙一(九州) 司祭 岩城 聰(大阪) 司祭 長田吉史(神戸)
聖職候補生 大岡左代子(京都) 池住 圭(中部) 高木栄子(中部)

青年委員会

委員長 司祭 小林 聡(京都)
委員 司祭 越山哲也(東北) 司祭 千松清美(大阪) 司祭 丁 胤植(中部)
新田紗世(東京)

年金委員会

委員長 主教 中村 豊(神戸)
委員 司祭 鈴木裕二(東京) 司祭 原田光雄(大阪)
岩井忠彦(横浜) 小川昌之(東京) 司祭 矢萩新一〔総主事〕 尾崎茂雄〔財政主事〕

年金維持資金管理委員会

担当主教 中村 豊(神戸)
委員 司祭 相澤牧人(横浜) 内田研吾(東京) 中林三平(横浜) 水澤郁夫(北関東)
三村英夫(東京) 司祭 矢萩新一〔総主事〕 尾崎茂雄〔財政主事〕

年金管理運用チーム

中林三平(横浜) 内田研吾(東京) 三村英夫(東京)

収益事業委員会

委員 司祭 中村 淳(東京) 久保田秀雄(横浜) 黒澤圭子(東京) 小出康之(東京)
山中 一(中部) 司祭 矢萩新一〔総主事〕 尾崎茂雄〔財政主事〕

祈祷書改正準備委員会

担当主教 主教 加藤博道
委員 司祭 相澤牧人(横浜) 司祭 市原信太郎(中部) 司祭 大町信也(北海道)
司祭 木村直樹(北関東) 司祭 笹森田鶴(東京) 司祭 宮崎 光(東京)
司祭 吉岡容子(九州) 司祭 吉田雅人(神戸)

宣教協働者招聘委員会

委員 主教 大畑喜道(東京) 司祭 金 大原(東京) 司祭 野村 潔(中部)
司祭 矢萩新一〔総主事〕

原発と放射能に関する特別問題プロジェクト

運営委員 委員長 司祭 野村 潔(中部)
 委員 司祭 岩城 聰(大阪) 司祭 越山健蔵(東北) 司祭 笹森田鶴(東京)
 宮脇博子(東京)
 事務局長 池住 圭(中部) 陪席 司祭 矢萩新一〔総主事〕
 研究広報チーム 委員長 司祭 岩城 聰(大阪)
 委員 司祭 神崎雄二(東京) 司祭 小林 聡(京都) 宮脇博子(東京)
 佐々木靖子(京都) 西間木美恵子(東北)

〔管区事務所の特別委員〕**エキュメニズム委員〔総主事所掌〕8名**

担当主教 主教 加藤博道(東北)
 委員 司祭 岩城 聰(大阪) 司祭 市原信太郎(中部) 司祭 西原廉太(中部)
 司祭 竹内一也(横浜) 浮田結子(大阪) 斎藤響子(東京)

教役者遺児教育基金・建築金融資金運営委員

司祭 小林尚明(神戸) 倉石 昇(横浜) 黒田哲朗(東京) 中原千津子(横浜)
 司祭 矢萩新一〔総主事〕 尾崎茂雄〔財政主事〕

〔主教会のもとにある委員〕**管区共通聖職試験委員会**

担当主教 主教 広田勝一(北関東)
 委員長 司祭 菅原裕治(東京)
 旧 約 主教 広田勝一(北関東) 黒柳志仁(京都)
 新 約 司祭 菅原裕治(東京) 布川悦子(東京)
 教 理 司祭 西原廉太(中部) 司祭 岩城 聰(大阪)
 教会史 司祭 小野寺達(北関東) 司祭 竹内一也(横浜)
 礼 拝 司祭 木村直樹(北関東) 司祭 吉田雅人(神戸)
 宣教牧会 司祭 黒田 裕(京都) 司祭 田澤利之(横浜)

教理礼拝組織調査員

員長 主教 加藤博道(東北)
 教理部 主査 司祭 高橋宏幸(東京)
 司祭 秋葉晴彦(北関東) 執事 遠藤雅己(神戸) 司祭 広谷和文(北海道)
 礼拝部 主査 司祭 木村直樹(北関東)
 司祭 内田 望(大阪) 司祭 大野清夫(横浜) 司祭 片山 謙(横浜)
 組織部 主査 司祭 土井宏純(中部)
 司祭 高橋 顕(東京) 司祭 山本 眞(大阪) 司祭 宇津山武志(横浜)

総会議長 首座主教 植松 誠

総会副議長 主教 加藤博道

総会書記局

書記長 司祭 片山 謙(横浜)
 書記 司祭 松田 浩(横浜) 司祭 斎藤 徹(北関東) 司祭 渡部明央(横浜)
 執事 岸本 望(北関東) 執事 倉澤一太郎(東京) 聖職候補生 平岡康弘(北関東)